



 福岡銀行

先進治療と在宅医療を柱に、  
地域に貢献し続ける。

医療法人柳育会  
りゅういくかい

理事長  
りやなぎ  
柳克司氏  
かつし

取引店／福岡銀行八女支店

#### ■法人概要

創業:1970年／創立:1990年／所在地:福岡県八女市／従業員:約800名／診療科目:外科、消化器外科、消化器内科、脳神経内科、泌尿器科、整形外科、呼吸器外科、循環器内科、放射線科、リハビリテーション科／関連施設・事業所:柳病院、八女リハビリ病院、グリーンビュー希望ヶ丘、メディカルフィットネスイースト、新やなぎ健診クリニック、八女ケア相談センター、柳育会訪問看護ステーション、ハローケア訪問看護ステーション、デイサービスセンター長峰の丘、軽費老人ホーム鐘の鳴る丘

ホームページは  
こちらからどうぞ!





「柳病院」前。左から柳東次郎院長(八女リハビリ病院)、  
柳克司理事長(医療法人 柳育会)、柴戸頭取

## ◇三叉路病院◇と評判に

### 個人病院から地域密着の医療機関に

わたしたち医療法人柳育会のルーツである柳病院は1970年、福岡県八女市に26床の個人病院として誕生しました。創業者である父・柳東<sup>やなぎあずま</sup>は、医師とは縁もゆかりもない家で育ちましたが、久留米大学附設高等学校の卒業後、久留米大学医学部に進学すると同第二外科に入局しました。その後個人病院を開業する際に、出身の福岡県小郡市から久留米市、さらに南へと開業地を探していたところ、八女市内の国道3号線沿いの三叉路のすぐ横、近隣からのアクセスが良いこの地を見つけ、「ここなら三叉路病院と呼ばれてきつと病院は発展できる」と信じ、ここ八女市吉田の地を選んだと聞いています。

開業後は地域に密着した医療活動を実践し、1990年、見晴らしの良い高台の地にこの地域のリハビリテーション医療の先駆けとなる「八女リハビリ病院」を開業するとともに、医療法人柳育会を設立しました。おかげさまで、2020年には開業50周年を迎えましたが、

現在は135床をもつ「柳病院」を中心に、190床の「八女リハビリ病院」、介護老人保健施設「グリーンビュー希望ヶ丘」、疾病予防運動施設「メディカルフィットネスイースト」、健診専門施設「新やなぎ健診クリニック」、訪問看護・訪問介護などの「新やなぎ在宅支援センター」、さらには関連事業としてデイサービスセンターやケアハウスなどを有し、急性期から回復期までの総合的な医療提供を行っています。八女市のみならず、隣接する筑後市、広川町、みやま市、さらには久留米市や佐賀県鳥栖市などからも、患者さんが見えなくなっています。

その大きな要因としては、専門性の高い医療と、地域に密着した医療を職員一丸となって提供していることにあります。特に、高齢者が多いこの地において、在宅医療には力を入れています。二つの病院の病床数は合わせて325床ありますが、在宅の患者さんは約600人。私たちとしては計約900床規模の病院のイメージで医療を展開しています。在宅医療の対応は、半径5km以内を基本としています。末期のがん患者さんの場合には、ご家族の協力



5



3



1



6



4



2



柳克司理事長

のもと自宅に戻りたいという要望があれば、もっと遠方であっても対応しています。

**大学病院から地域医療へ  
臨床の現場に立ち続ける**

私は、愛知県の藤田保健衛生大学(現・藤田医科大学)を卒業後、同大学で研修医として勤務した後、地元に戻り、久留米大学医学部外科学教室に入局しました。入局後すぐに久留米市にある聖マリア病院に外向し、救急医療の技術を学びました。

大学に戻ってからは肝胆膵領域の診断治療を行う研究室に在籍。久留米大学病院消化器

病センターでは、消化器内科と消化器外科が協力してさまざまな症例に取り組んでおり、外科である私もここで、本来は内科で扱うような内視鏡を用いた診断・治療を経験しました。私の大学時代の恩師は、「外科医とはメスを持った内科医だ」と常に私に語っていました。私もこの頃の経験から、そのことを実感し、「外科は縁の下の力持ちであり、内科と一体になって治療に当たっていくべき」という考えを、今でもしっかりと胸に刻んでいます。

久留米大学を離れ、柳病院に着任したのは36歳の時。それまで、最先端の医療や最新の機器に触れて医療を行っていたところから、いきなり地域医療の世界に入ってきたわけですから、最初は私自身、職員ともに多くの戸惑いがありました。先代からは、「患者さんはもちろんだが、職員やその家族のことを大切にしなければ」とよく聞かされました。

柳病院は外科と内科の医師の協働体制がしっかりとっており、職員も病院のこと、患者さんのことを思う気持ちがとても強いと感じています。私も地域医療に少しでも貢献できるように、理事長に就任した今でも深夜の在宅診療



1.対談風景／2.超音波内視鏡／3.柳病院1階ロビー／4.柳病院を見学／5.メディカルフィットネスイースト／6.メディカルフィットネスイーストを見学／7.八女リハビリ病院とグリーンビュー 希望ヶ丘を上空から／8.八女リハビリ病院内訓練室／9.巡回検診車／10.ケアハウス鐘の鳴る丘／11.メッセージ





# 新やなぎ 在宅支援センター



「新やなぎ在宅支援センター」前。前列左から柳俊光統括部長(医療法人 柳育会)、柳東次郎院長(八女リハビリ病院)、柳由紀子理事(医療法人 柳育会)、柳克司理事長(医療法人 柳育会)、柳徳枝特別相談役(医療法人 柳育会)、柴戸頭取、矢野支店長(福岡銀行)

には自ら出向き、外来にも出ています。「どのような立場になっても臨床を続けなさい」と言ってくれた恩師の言葉を胸に刻み、職員とともに、最前線で頑張りたいと思っています。

## 最先端の機器でがんを診断 得意分野を地域にアピール

地域医療への貢献と同時に、この地域では数少ない胆道、膵臓がんの治療の力を入れています。柳病院は、県内でも数少ない「日本胆道学会認定指導医制度」指導施設、「日本膵臓学会」指導施設などの認定を受けています。この専門医の指導施設に認定されるためには、大学病院に並ぶ医療機器の導入が必要となります。柳病院には、膵臓や胆道のがんを調べるのに大変有効なEUS(超音波内視鏡検査)をはじめ、高画質な画像診断を可能にする最新型1.5T MRI、64マルチスライスCTを導入しています。特に膵臓がんは、今なお生存率には厳しいものがありますが、それを確実に診断するための検査ができることあって、県外から来られる患者さんも増えています。

ただし、こうした最新医療設備の充実も認知度が至らず、地域の方々から見ると「個人病院であっても先進治療が受けられる」というイメージがありません。柳病院にできることを、しっかりとアピールすると同時に、私たちが地域に何を還元できるかを、もつと考えていかなければと感じています。

### コロナ禍を乗り越え 外来や在宅医療の拡充を

新型コロナウイルス感染症において、柳病院では外来の時間を区切ってワクチン接種に積極的に対応してきました。がんの患者さんが多く、一般の診療を止めることができないことから、コロナに感染した患者さんの受け入れをすることはできなかったのですが、それでも職員にはさまざまな規制を強いることとなり、大変申し訳なく思っています。職員もクラスターを出さないよう細心の注意を払ってくださっており、柳病院がここまで大きくなれた強みの一つは、こういった職員の頑張りにあると、あらためて実感しました。

現在は、母・徳枝とくえが特別相談役となり、長男である私が理事長、妻が保健師として訪問看護ステーションの責任者、次男が「八女リハビリ病院」の院長、三男が本部の統括部長、四男がケアハウス「鐘の鳴る丘」の施設長を務め、熱意ある職員たちとともに、この病院運営に取り組んでいます。ところで徳枝の曾祖母の兄には旧福岡藩御用商の佐野彌平さの やへいがいます。佐野彌平は1877年に現在の福岡銀行の前身である第十七国立銀行が創立された際、黒田家に次ぐ大株主であり、初代頭取という重責を担いました。そういった誇らしいルーツをもつ私たちはその名に恥じぬようしっかりと地域医療に貢献していかなければなりません。八女市は高齢化率も高く、人口も減少してきていますが、隣の筑後市などは若い世代の人口が増えています。柳病院の外来の患者さんも増えてきています。まさに、創業時に近隣からのアクセスが良い国道沿いのこの地を選んだことが、発展につながっているのではないのでしょうか。開業当初からの「地域医療への貢献」という精神はぶれることなく、今後はさらに外来や在宅医療の拡充も目指していきたいと思っています。

## ■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 柴戸 隆成



26床での開業から、現在は柳病院・八女リハビリ病院を合わせ計325床もの病床まで拡大され、医療から介護福祉、健診・予防などの分野にも積極的に展開を続けてこられました。

近年、高齢化が進んでいる影響もあり、今後も在宅医療のニーズはさらに高まるとともに、若い世代の検診率も上昇していることで、来院患者様の増加が予想されます。先進治療と在宅医療を柱に、ますます地域医療に貢献されることを期待しています。



熊本銀行

自走式立体駐車場を全国に展開。  
鉄を通じて良い製品を届けたい。

雄健工業株式会社

代表取締役  
出井健太郎氏

取引店／熊本銀行 玉名支店

#### ■会社概要

創業:1977年／所在地:熊本県玉名郡長洲町／  
資本金:1億円／事業内容:自走式立体駐車場の  
設計・製作・施工・販売／事業拠点:(本社工場)  
熊本県玉名郡長洲町(営業本部)東京(事業所)  
札幌・仙台・東京・金沢・名古屋・大阪・広島・福岡・  
沖縄／関連会社:YK熊本株式会社、株式会社  
YKP建築設計コンサルタント、YKメンテナンス  
株式会社

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!





YUKEN

本社工場前(左から出井社長、野村頭取)

## 金属加工から駐車場事業へ 一貫して鉄と向き合う

当社は、私の父・出井次雄<sup>つぐお</sup>が、1977年に設立した鉄工所「有限会社出井工業」が起源です。本社のあるここ熊本県長洲町は、有明海に面し、長崎県島原とを結ぶフェリーのターミナルがあつて、造船業をはじめとした製造業が昔から盛んなところです。そのため、腕のいい鉄加工の職人が集まっていたことが、ここで創業するきっかけになったそうです。

この地で小さなプレハブの鉄工場から始め、一貫して鉄と向き合いながら一般金属加工、一般鉄骨製作を中心に事業を展開してまいりました。1984年には、父の名前の「雄」と、長男である私の名前の「健」を取って、社名を現在の「雄健工業株式会社」に変更し、1988年からは今の当社の主力製品となる自走式立体駐車場の製作事業に乗り出しました。

現在では、全国でも数少ない自社工場での製造による自走式立体駐車場の専門メーカーとして、北海道から沖縄まで日本全国をカバーするまでに至っています。年間の施工棟数

は平均して24〜25棟ほどで、以前は集合住宅や遊技場用が多かったのですが、今では工場や病院、公共施設の駐車場が主流になっています。最近の大規模な事業としては、コンベンションホールやホテルなどを有する長崎市の新しい交流拠点施設「出島メッセ長崎」や、東京都の「豊洲市場」の自走式立体駐車場を手掛けています。

## 認可を受けた自走式立体駐車場の 専門メーカーの強みを生かす

自走式立体駐車場事業をスタートさせた当初は、1層2段の駐車場から始めましたが、時代とともに駐車場の階層が増えると、さらに高い製造技術が求められるようになってきました。自走式立体駐車場は、連続傾床など特殊な形状をしている駐車場が多いため、駐車場製作に慣れている工場で鉄骨製作をすることが、非常に重要になってきます。そのため当社では、設計から図面作成、工場加工、工事までを一貫してできる体制を整えました。こうして初めてメーカーとして、クライアントの



5



3



1



6



4



2



出井社長

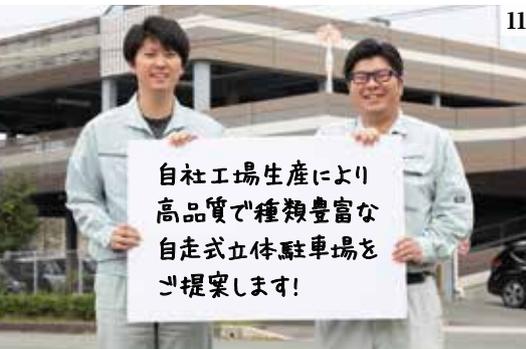
あらゆるニーズに応える自走式立体駐車場を提供できると考え、今に至っています。

さらに、自走式立体駐車場は地形や条件に合わせて建てなければならず、設計段階での打ち合わせが重要になります。そこで当社では、全国の各事業所に、設計スタッフを配置し、営業スタッフと一緒にお客様のところに直接向いて、その場で打ち合わせを行います。お客様のニーズに合った提案がすぐにできることが、当社の大きな強みになっています。

最近、特にニーズが増えているのが店舗と一体になった駐車場です。コストが抑えられるため、非常に需要が伸びています。ただし店舗の部分と駐車場の部分では、柱の数などの構造がまったく異なり、さらに1,000台も収容するような施設になると、専門メーカーとしての技術や実績がなければ対応できません。今後私たちが主力事業として、店舗付駐車場のさらなる普及に努めていきたいと考えています。

多雪地域の駐車場も、通常の設計とは異なります。雪が多い地域の駐車場は、雪の重さ（積雪荷重）やヒーティング設備、防雪ネットなどが必要になってきます。さらには、雪を溶かす塩化カルシウムがタイヤに絡んで鉄筋を錆びさせてしまったり、氷柱対策が必要だったりなど、トラブルが何かと多いのも特徴です。このような特殊な条件においても、専門メーカーとして長年培ってきたノウハウのもと、ご提案させていただいています。

1992年には、国土交通大臣指定鉄骨製作工場の性能評価において「Mグレード工場認定」を取得し、2009年には駐車場製造



1.対談風景/2.3.4.5.6.工場見学風景/7.施工例:地下3階地上2階建て駐車場/8.施工例:6層6段個別認定店舗付駐車場/9.多雪地域では降雪センサー、地温センサー、外気温センサーの組み合わせで感知し雪を融かす/10.駐車場施工実績:出島メッセ長崎/11.企業メッセージ



最前列左2人目から出井社長、野村頭取、東支店長(熊本銀行)

としてはトップレベルの「Hグレード工場認定」を取得しました。さらに、国の厳しい基準をクリアした国土交通大臣認定品であることから、「延焼ラインによる防火設備設置の緩和」「耐火被覆が不要」「防火区画が不要」といった防火設備の緩和などにより、確実な低コストを実現しています。特に店舗付駐車場においては、当社の豊富な経験に基づいた構造の合理化により、一般建築よりも大幅なコストダウンが可能となっています。

**「できない」を言わない  
確かな提案力を強みに**

私自身は慶應義塾大学を卒業後、経営コンサルティングやITベンチャー企業を経験し、その後、当社に入社しました。前職で様々な企業の経営を第三者として見てきたつもりですが、実際に経営するとなると、そう簡単ではないことを実感しています。

経営者としては、当社のモットーである「できないと言わない。どうしたらできるか」を大切にしています。例えば、当社の営業スタッフは

皆、設計のことをよく理解しています。お客様からご要望を承った際に、たとえその場に設計スタッフがいないくてもすぐに設計プランをご提案できるように教育を徹底しています。一方で、設計スタッフにも、営業に同行するだけでなく、自分一人でもお客様のもとに出向いてご相談に応じられるよう、しっかりと教育を行っています。

「できない」と言うことは簡単です。しかし、それを言わずに、何か近いものが提案できないだろうか、自分たちであればそれがきつとできると信じています。また、お客様からのご要望に対して、社員全員で議論し、答えを導き出していけるような社風も大切にしています。

### 景気に左右されず 確実に成長を続けていく

建設業界は景気に左右されがちと言われますが、この駐車場事業においては、それほど影響を受けることはありません。たしかに、2020年春は新型コロナウイルス感染症の

拡大で、一時的に作業そのものがストップになったことはありましたが、工事のほとんどが屋外での作業ということもあり、すぐに工事は再開されました。最近では資材価格の高騰といった問題はあるものの、駐車場事業は常に2〜3年先の建設に向けて準備を進める、一歩先を見据えた事業です。そのため業績は非常に安定していると思います。

工場においては、溶接ロボットをすでに導入していますが、今後は組み立てロボットの導入も検討しています。人材不足の解消はもちろんのこと、例えば夜中にロボットによる作業が可能となれば、さらなる業務の効率化につながるのではないかと考えています。

これからも自走式立体駐車場メーカーとして、九州有数のファブリーケーター（製造・加工業者）として、鉄に強いこだわりを持ち、現状に満足することなく創意工夫を重ねていきたいと思えます。さらには、これまでの発想を打ち破るような新しい商品開発・改良、技術向上、生産能力向上に、従業員一丸となって、日々取り組んでまいります。

## ■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 野村 俊巳

熊本県長洲町で創業されて以降、これまで44年の歳月で全国に拠点を持つ自走式立体駐車場のリーディングカンパニーにまで発展されました。鉄骨工場としてHグレードの評価認定も受けておられ、ゼネコンからの信頼も厚く、一般の高層建造物にも対応できるなか自走式立体駐車場に軸を置き、九州以外の地域でも数多くの設置実績を誇っておられます。

長洲町は造船業をはじめ多くの製造工場が進出されています。これからも長洲町に本社を構える企業をリードされ、長洲町の発展に寄与していただくことを期待しています。





**JS** 十八親和銀行

五島列島の恵まれた海で  
養殖魚の可能性を追求し、  
極上の旨みと甘みを実現。

有限会社 橋口水産

はしぐちすいさん

橋口直正氏

代表取締役

はしぐちなおまさ

取引店／十八親和銀行 福江支店

#### ■会社概要

創業:1963年／所在地:長崎県南松浦郡新上五島町／資本金:800万円／従業員:38名／  
事業内容:ブリ・ヒラマサ・マグロの養殖、鮮魚加工  
および二次加工製品の製造／事業拠点:(本社)  
長崎県南松浦郡新上五島町(水産加工場)長崎市

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!





長崎市の水産加工場前にて(左から橋口社長、森頭取)

## 養殖に適した海域で 養鶏業から転身して創業

当社の歴史は1963年に私の父・兼助かねすけが五島の沿岸で水産養殖を始めたところからはじまります。五島列島にある若松瀬戸の島々には、南太平洋から日本海を北上してくる黒潮が流れ込み、潮の流れは速いものの、波は比較的穏やかで、赤潮の心配がほぼありません。養殖場の周囲の海水温は一年を通じて13℃以下になることがなく、夏場でも29℃を超えることはありません。条件的には、回遊魚ブリの養殖に打ってつけの好環境といえます。

創業当時は、県が水産養殖へ力を入れ始めた時期で、新しいことへの挑戦を考えていた父が参入を決めたと聞いています。それまで養鶏場を営んでいた父は生物の飼育に関する経験はあったものの、魚の養殖に関する知識は乏しく、当初は、生産の歩留まりが悪く苦勞の連続だったようです。それでも、県の水産試験場との連携を通じて地道な努力を重ね、徐々に生産量を増やしてきました。

また、養殖を行う魚種についても試行錯誤の経緯があり、採算・品質を検討した結果、現在はブリ、マグロ、ヒラマサの3種のみを取り

扱っておりますが、トラフグ、マダイ、イシダイを始め、あらゆる魚を養殖場に入れて水族館のような状態だった時期もありました。

東京の大学で水産関係の学びを修めて帰郷した私が、養殖事業を手伝うようになって7年ほど経った1993年、父が他界し、私が経営を引き継ぐことに。業務に関しては一通りの知識を得ていたものの、経営に関してはほぼ素人でしたから、組織の代表としての私の第一歩は試練に満ちたものでした。

## 独自性を打ち出すために 9年かけて餌を開発

日本の高度経済成長期は、モノは生産すれば飛ぶように売れる時代で、当社でも、とにかく餌を大量に与えて魚を大きくして、数も増やす生育法を取り入れていました。しかし、時代が変わって全体的な消費が落ち着きを見せると、途端に生産過剰状態に陥り、売り値が下落。厳しい時代を迎えることとなりました。

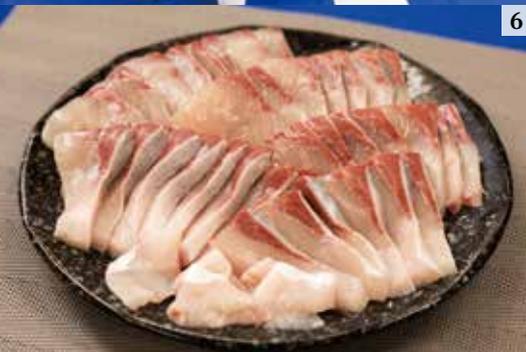
生き残りをかけるべく、まず着手したのは、生産原価のコスト管理と生産の歩留まりを向上させる取り組みでした。とくに、生産歩



5



3 1



6



4 2





橋口社長

留まりに関しては、魚の大量死を招く病原菌に対するワクチンが開発されたのが、大きな前進につながりました。

また、他県でも水産養殖の技術が向上していたので、当社としては独自性を打ち出す取り組みにも力を注がねばなりませんでした。そこで、私が経営者になって掲げたのが「手作り養殖」。日々魚と対話するようにして一尾一尾を大切に育てる、手作り感のある養殖法です。いわば手間暇を惜しまない、だれにも真似のできないやり方を作り上げるのに、来る日も来る日も心血を注ぎました。

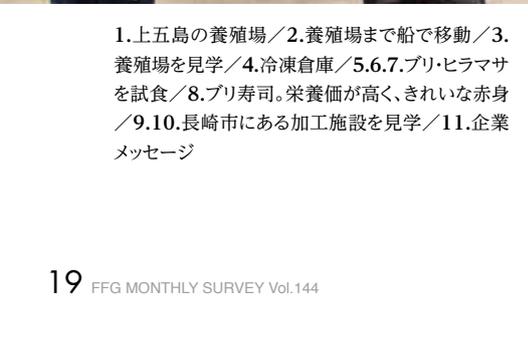
例えば、餌は一般的な固形飼料をやめて生の餌を使用。素人でも取り扱いやすい固形

飼料に比べて手間は3倍も4倍もかかりますが、魚の形や色合い、大きさなど、質を向上させられます。餌の独自開発には9年の歳月を要しました。具体的には、五島近海でとれる新鮮な生餌をベースにしつつ、養殖魚を太らせるのに不可欠とされた魚油をカットして大豆やトウモロコシなどの穀物や酵素分解物を主成分にした高機能サプリメントで育成しています。

### 独特の旨みと甘み、品質の高さで注目を集める

年月を費やして「手作り養殖」の技術に磨きをかけてきた結果、ある意味で「天然をはるかに超えるブリ」を作るのに成功したと考えています。当社のブリは「深い旨みと甘さがある」のが特徴ですが、これは自社開発の餌と五島の海域によって良質の脂を豊富に蓄えた肉質を実現したからであり、それは第三者機関による分析結果にも表れています。

私たちの健康や美容に有用な働きをするDHAとEPAは、近年の健康ブームに乗って注目されており、DHAは乳幼児の脳や神経



1.上五島の養殖場／2.養殖場まで船で移動／3.養殖場を見学／4.冷凍倉庫／5.6.7.ブリ・ヒラマサを試食／8.ブリ寿司。栄養価が高く、きれいな赤身／9.10.長崎市にある加工施設を見学／11.企業メッセージ



前列左3人目から橋口社長、森頭取、森田支店長(十八親和銀行)

の発達に必要な成分、EPAは血液や血管の健康維持に重要な成分とされています。しかしながら、ともに人体ではほとんど作り出すことができません。当社で育成したブリの場合、DHAとEPAは天然ブリの約2倍で、天然マグロの約38倍も含まれています。味だけでなく成分の面からも競争力のある商品を作り出した結果、数々の品評会で優秀賞をいただき、当社のブリのブランド価値を高めることになりました。

その一方で当社では、ブリの出荷時期の課題にも挑戦してきました。ほとんどの天然魚は産卵後の6か月で旬を迎え、おいしい時期が2か月で終了してしまいます。良質の脂質をのせた旬の時期を延ばすための研究努力を積み重ねて、いわゆる「寒ブリ」のおいしさを8月から提供できる養殖技術を実現しました。

### 自社施設で鮮魚加工を施し 即日出荷できる生産体制を確立

養殖魚の生産という事業だけでは、市場や加工業者など外的要因に影響を受けやすく、安定した事業運営を維持するのが困難である

と気づいたのが、鮮魚加工に着手するきっかけでした。

近年、農林水産省が推進する「6次産業化」の動向もあつて、鮮魚加工を事業の柱に加え、2017年に自社加工施設を造つたものの、運営が軌道に乗るまでは苦難の日々。工場経験者が工場長に就いてくれたのが救いでしたが、人材募集をかけて集まった加工スタッフはほとんどが未経験者だったため、ほぼ1年間は手探り状態での操業が続きました。しかし、試行錯誤を重ね続け、加工技術は着実に向上。現在では、注文が入った段階で必要量だけ漁を行い、水揚げした魚をその場で生き締めして加工施設へ直送し、スムーズに加工を施すことで、高い鮮度を保つた商品製造を実現できています。

また、養殖魚の過剰生産で価格下落を経験した際、そのリスク回避策として当社が目をつけたのが海外における販路開拓で、自社加工施設はHACCPを取得し、アメリカ、中国、EU等の海外向け輸出取引に必要な施設登録を完了しています。徹底した衛生管理のもと、お客様のニーズに合わせた加工を施して、その日のうちに出荷を行える生産体制は、当社の強みのひとつとなっています。

## 国内外でより求められる商品の開発に注力したい

2018年には、アメリカカボストンで開催された世界最大規模のシーフードショーや、中国チンタオのシーフードショーに出展し、当社の養殖ブリは海外で高い評価を受けました。その結果、海外のミシラン星獲得店などでも食材として採用していただけるようになっていきます。国内では、豊洲、大阪、長崎の魚市場や、有名小売食料品店などでも取り扱っていただいております。

さらに、従来は三枚おろし状態の切り身などが加工品の中心でしたが、より消費者に向けた商品開発へ注力しており、ブリの西京漬け、照焼き、みりん干しといった、解凍してすぐに食卓に出せる商品を出荷し、好評を得ています。誰にも真似できない養殖法によって生まれる良質な脂質を豊富に含んだブリの特質を活かした商品ラインナップの充実に一層力を注ぎ、ブランド価値を向上させることで、生産地である五島の名も世界に広げていきたいと考えています。これからも、国内外の皆様へ安心・安全で高品質な食をお届けすると同時に、育てていただいている五島の地へ恩返しができるよう邁進していきたいと思っております。

## ■ インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 森 拓二郎



水産養殖の好立地である五島列島で養殖事業を開始されて以来、半世紀以上にわたって独自の養殖技術開発に今なお取り組まれています。その結果、年間を通じて脂の乗りがよく、かつ栄養価の高い養殖ブリを市場に供給され、高品質が認められて数々の品評会においても高い評価を受けられています。

近年では国内のみならず、中国、韓国、北米、中東、欧州への輸出も行う一方で商品開発に注力され、多様なニーズに応じた商品群を展開しておられます。これからも、五島列島の海が育んだブランド魚の価値が世界中に広がることを期待しています。